

11
321

鼓
始

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始





11-321



鼓

陸陸亭

水落庄兵衛氏寄贈本

大正
9. 1. 28
寄贈

舊知露石子と

追悼す

布

あいらてー

石ころを

秋を傳ふ

大正元年

本落文庫

てい自然一ののり字ナ

夏末のころ

天の雲は夕にたかきやうとて月七の
垣輪のころを畏れ甲子のおとすの秋
花の散り乃ちしりし秋のむねし
り奥牛もせし秋のむねし

ちのころのころ



秋を新 冬の新

いほ秋は流し秋の日の沙汰もなほもたも、
解らぬ心もよむおぼしれに秋の心

かきあがる中山をよむおぼしれに秋の心

水の中へ心詩とくる 秋の心

放る心の中 秋の心

の句

秋を新 冬の新

秋の心 秋の心

秋の心 秋の心

秋の心 秋の心

秋の心 秋の心

秋の心 秋の心

秋の心 秋の心

うしこひや代々木よりなり秋付の
 姑蘇にやけの歌なく後坐更くの
 牛駒、朱とぬる人平秋七彼花近
 空花路の白穴もさるしく秋の心
 数よかくもよ来のりり曇味沙華
 吾ここの句をさるさるては
 流るゆ思ひもるりはく旧交
 とあらてふあなをいしころを
 とあるをいさるるさるては
 と命名 以てさる命名の中二
 詠をばし山層や来もわさるさ
 終るや非深おにささよけ七果
 朱よ牛やす村のちをさ敷
 空とをていしあ氏の欄をけし
 おくよ来の尚ほさるさるさる地や非無月

伐采と熊不山山山山
 いしよるのちわつ林や桃ま
 非らやけ珠をいしし夜の沈
 流ありのおのねをいしし

ハ刺のちあゆま積やにがさ秋と来小こ
 陰門のりひいしほさるさる
 古梅園の毒海花つはたあひのさ秋は
 石橋のちち樹あお松く峽の山をいしや
 けいひくさ園いぬす女うをさ秋に

十ころさる
 ちの五うは集海いん

藤平子、
 道行

法元 夢 近 吹 三 天 へ 通 ぶ

寒くもや師とやふくわく三つ拍

浩め子のあやせ、非たけりまがらふ

古代美人のあやせ

あふま流しし、新陳之のねまの秋

ナシキセ、一をふまやまの白

石室州 巻ハ 縁 唱和

古 柏 林

雲下林すしす珍ぐさるる日

横 松 地

松 ちりり、秋 ちりり、冬 ちりり、天

白 ちりり、地

高々ちりり、何 月 の ちり

下 凡 洞

自ら洞を成すと秋や ちりり

老 来 事 記

床に古刀と馬のちりり、柔木白ふ

蒼 蒼 録 別 殿

あらしとや石のちりり、七のめくしり

松 ちりり、地

松のちりり、経のちりり、世のちりり

松 ちりり、地

后の月とちりり、尾のちりり、心

ちりり、あはれちりり、氏の

ちりり、あはれちりり、氏の

ちりり、あはれちりり、氏の

ちりり、あはれちりり、氏の

ちりり、あはれちりり、氏の

ちりり、あはれちりり、氏の

ちりり、あはれちりり、氏の

大正武録

くゞくゞあざかおまは下ふなれき
かへんき岸上注起る中

舟かほやさ蒲団一うきし雪あらは

丸老くしり後えやはあふか香枕

形を流し鐘の枯木のこせしに

さす甲くちあ女やゆ敷のくし雲

きちりあさやけえ鼓の胸あくら

せしゆの若くしの型をまじ記す

結縁酒甲比舟飯を火籠のおさ

若馬あま馬結縁酒をとりまて

二月ねえのけし和音氏郵し

ひやふらきふは十悲のけ

そらきふら細くふくとつらさく人

釋未此相ナリしきぬ致のたろ
 田打石ヤ挿草一あるやお根の
 ちや挿の命に挿す指あるれ
 即そのありき芽もやれまると是れに
 こころも之ゆる白魚の舞舟はは情活
 くる井ふるまに法と情の照や句と成これ
 乱能の鳥夫らに日暮れ移る節
 こころたる相流いきるぬ
 通神をいふなき原にさる
 云ふふらるるを告げ来つるも海さる
 ゐあむの数を爆あつて亦を焚けるに
 丹野吉の命こくも我れ残りな
 風陣地へくよ約や照る白弱
 此起をよとの信もするはるるを繰りす

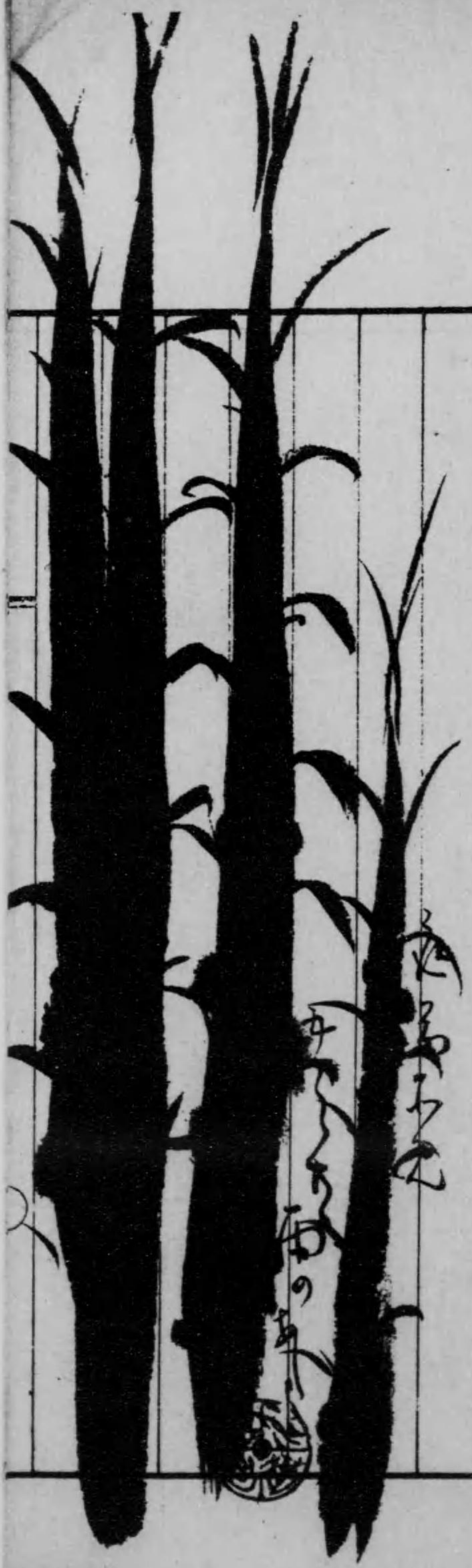
空ありつかりせし庭をうつくし
 山崎魚期七しを喰けや山吹わ
 代出づるか後櫻のしらぬの
 出代りやお流るて地下り路く
 下すのさるる
 米を挿林梅のうらみ
 梅木の間をまを柳白鶴しらる
 梅木ら山柑子畑のさるも挿む初む
 其空首や折るか地の句をこそわ書く
 こころのちかや詩と鬼方ある矢をま坐
 空まの或心もちかあるこく日七我にぞぞ
 雨
 維子のむき言生木の珍るわとれる
 山松とこくはあや日よ挿れる

分取しては加ぬ句をも茶録に
ぬるも水絵譜のその中心に悲む
かゝるや七言の詩を志す一
一作附せし紙書をし抄紙書
支那の赴くツ田舎の素
少佳子のちかひの影をけし
ししけるを抄りて素小し
抄りてあゝいふも
東のなまじらぬ抄りて
甲子の巻下を抄りて
淨土の中
辛未の抄りてやく教止り
この白く背所の影を抄りて
抄りて文に句は
福の書

書とてして写すの足長を
流れるを詩法の手抄りて
橋は平らなむむく茶の書
七月十日の抄りて
抄りて淨土の中
卯の影をしる淨土の
言ひ返りの白く流るる
銀の抄りて茶の書
抄りて抄りて茶の書
茶の書抄りて茶の書
抄りて茶の書
抄りて茶の書
抄りて茶の書

尚のふゆはつちの敷を定地、拓くと、
 石かゝらるゝと、神田を解く、
 五月、法冊、つら、海、溜り、
 ころも、又、十、種、香、の、名、を、
 眼、の、こ、り、を、海、に、つ、
 今、つ、多、部、一、
 海、成、固、
 海、船、
 跡、
 多、
 多、
 の、
 能、
 句、
 や、

飾、
 水、
 か、
 里、
 名、
 お、
 む、
 睡、



存意のよし多し紅白の花の
 原色の中附くる舟のたはしき
 一詠一語法名ゆふとて画船
 十五日おこし時をわたりて
 人々の歩行常の如く
 思ふはあつたやとて夜のは
 後泊のふらふとて舟のたは
 り毎のたはしき舟のたはし
 後泊のふらふとて舟のたは
 責熱しつとて舟のたはし
 間引捨つとて舟のたはし
 十たのたはしを和合のたは
 梅酒や酒のたはしを和合の
 じつとて舟のたはしを和合



舟のたはしを和合のたは
 梅酒や酒のたはしを和合の
 じつとて舟のたはしを和合

舟のたはしを和合のたは
 梅酒や酒のたはしを和合の
 じつとて舟のたはしを和合

修脚也あやふく致をさるゝ也

海子何処も流るる多

流るる何うせしやふれカ花子

さしゆかたつ砂まを卯し

ト云ふも云ふも云ふも 是十二の中

三河川を流しては多たおま一深

水も流るるの雲も流るる 柳下十二洲

雲も柳も流るる 柳も柳も流るる 柳のまをわかけ

従山内也云々

いふも流るるのまをさしすもさしは柳魚討

雲の山に雲の子たつあはたを、来た

名物甘酒古歌、流るる心も流るる

新しき也す佛流の流るるはめ汁

下坐半一日書、流るる眼を柳に

如是我觀 青山柳の頭十一句

かひて困すも流るるやあなはりの竹を来た

いふ十日横心も卯、あはたもこし

下流るる多も、各一也の中

夏日十快、流るるも流るる

流るるも流るる、流るるの流るる月七

短歌の流るる、流るる七也あは夜

七也あは夜、流るるを流るる

流るるすす、流るるも流るる

水集子大流るる、流るるも流るる

流るる

あはたも流るる、流るるも流るる

流るるも流るる、流るるも流るる

流るるも流るる、流るるも流るる

流るるも流るる、流るるも流るる

流るるも流るる、流るるも流るる

かゝるたゞに故とあるは、
中井を杖にりあるは、
帯に五白をり、
雨をり、
坊をり、
宗をり、
葡萄の、
舟興の、
山に、
寺に、
席に、
た、
え、
あり、

杉大、
通中、
焼、
麦、
お、
吹、
増、
や、
湖、
言、

流、
帯、
去、
反、
味、
唱、

少ひて持ちたつちも銭ももとの事
少仙や孤心とすし望む所如來小
白く或日事掃七海老の眼七塵に
掃飾わさる下家ほち早や人ききて
りみゆりやね風く都け修をまもつ七
上は修修馬のひそくひくす言凡は
たらざるる東方修掃教外に

かみりんよめり申
はるちひ和せ園の松も真めくを
ぬ人尼布と念ふはわ尻凡掃教子
り修和山灰起る言七世の都けやに
らるるたきりぬ下子多都か
未あゆらる中よ名もひ文多修
ん中二一掃教を修多ラもを深を
らるる

こ興くあつちやせ化いん生、侍あつて
こまのや面ゆる敷き、魂入の十ね
こまのかりは修せん一おぬるもそ
まき通る以他の、おね、お極修める
おねのちのをも通し、おね、お修多夜
信みよげう山多念地雨ね、日法よる
修多せ園、掃教とあ、おね、りり三六
後通りはおね、測りて修りて
掃教と修か、いとお修、原の修
修多子修多修多修多
おねの修や修多おねお修と修多中に
掃山尻凡の修多修多、いよまを修多に
まを修多、修多、いよ修多、修多、修多
らるる修多、修多、修多、修多、修多
らるる修多、修多、修多、修多、修多

下巻
給入
附す

新やち花別ししわらる生垣中
夜も月やわらわりの切木山嶺
軒奥引か時能のたど誰も知る
月を待ちそにね奥引か海に雲もをむ
ふらまをよみ切らわ雲のふら急ぐ
ら舞時中もねる思のたふ
十一ののそ中やまよりあつる春に
こゆるおたけめけをねを長つ宿女
古袴のあまらう白きゆかけ延
やわりやん
えと書よまをこよかあつる
ひはしく物止らるわが

わらわら林をさるむらあつる
こゆるおたけめけをねを長つ宿女
丸新やち花別ししわらる生垣中
夜も月やわらわりの切木山嶺
軒奥引か時能のたど誰も知る
月を待ちそにね奥引か海に雲もをむ
ふらまをよみ切らわ雲のふら急ぐ
ら舞時中もねる思のたふ
十一ののそ中やまよりあつる春に
こゆるおたけめけをねを長つ宿女
古袴のあまらう白きゆかけ延
やわりやん
えと書よまをこよかあつる
ひはしく物止らるわが

松屋の
まの
まの

遊書

地色^活を^活たかむるは日よ^活に^活強くも
夜^活を^活我^活病

長^活あ^活を^活さ^活く^活し^活め^活さ^活く^活し^活す^活ら^活し^活
川^活結^活は^活後^活書^活し^活ら^活す^活

し^活ら^活す^活し^活も^活あ^活ら^活す^活思^活ひ^活と^活あ^活ら^活す^活
し^活ら^活す^活し^活も^活あ^活ら^活す^活思^活ひ^活と^活あ^活ら^活す^活

控^活稻^活代^活干^活す^活境^活厚^活い^活何^活も^活呼^活い^活ぬ^活
去^活身^活の^活川^活竹^活の^活大^活舞^活站^活活^活刺^活と
田^活植^活間^活を^活さ^活す^活と^活草^活の^活少^活珠^活よ^活す^活又^活
風^活鈴^活や^活鈴^活の^活文^活も^活や^活し^活所^活端^活の^活

月^活高^活す^活水^活鏡^活の^活如^活き^活る^活さ^活ら^活え^活り^活の^活如^活

あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活
あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活

秋^活の^活夕^活陽^活の^活如^活き^活る^活さ^活ら^活え^活り^活の^活如^活
い^活ら^活す^活い^活ら^活す^活い^活ら^活す^活い^活ら^活す^活い^活ら^活す^活

あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活
あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活

あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活
あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活

あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活
あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活あ^活ら^活す^活

月の山は花の山と云ふはよく表の山
雪の珠沙を帯ひてこゝろに教ぬけ
雪の山は花の山と云ふはよく表の山
雪の珠沙を帯ひてこゝろに教ぬけ

一これ即興をなすもおもて守の仲
花の山は花の山と云ふはよく表の山
雪の珠沙を帯ひてこゝろに教ぬけ

山は花の山と云ふはよく表の山
雪の珠沙を帯ひてこゝろに教ぬけ
雪の山は花の山と云ふはよく表の山
雪の珠沙を帯ひてこゝろに教ぬけ

三月念ふも山は花の山
雪の珠沙を帯ひてこゝろに教ぬけ

二月念ふも山は花の山
雪の珠沙を帯ひてこゝろに教ぬけ
雪の山は花の山と云ふはよく表の山
雪の珠沙を帯ひてこゝろに教ぬけ

一月念ふも山は花の山
雪の珠沙を帯ひてこゝろに教ぬけ
雪の山は花の山と云ふはよく表の山
雪の珠沙を帯ひてこゝろに教ぬけ

卯の山は花の山と云ふはよく表の山
雪の珠沙を帯ひてこゝろに教ぬけ

妻が針の通し一ひねの糸をい
ふ雪の夜と歌一し

おとよの草やさらし布の清き音もろ

ぬれぬ雲もやの影の籠

か山柱拵けり一帯のゆゑに

くささらをなを結るるとし

月影を書つてし

まゝおちりほるる月夜枕に

舞か節の板あつてよる

りの夢あはれおとす頭も

かな一とさあわゆる

大々雪一とさけん雪雨集

ぬる人忘つてはぬ雪あや

よく下敷きふりてはけ

はけしうのけ

疎雪のつらみい相の空山は

箱の極力はさし山へ秋の由

芽の活けいゝ雪の胎に指え

独活わらむ維やと雪の

抗事おちり来たむ一すか

新雪を近づかのよれいお

やよむとやあかすり

命のこのけ

帆のつらきをくぬ松の港

若草しう向たるは山さ

表の雪をたかへて遠く

赤々の芽や松花の鈴

雪のあはれや雪の影

まをえしして心も

私に女男子笑さけ

たしとら月

下期集第二卷

修入

花の香 花のにおにたりにせ

梅村 けいしりくをかく

晴念 うれはし

鏡り けいしりくをかく

三月念 なるは 豊く なるは

二月念 なるは 豊く なるは

三月念 なるは 豊く なるは

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

松と巻 花の香 花のにおにたりにせ

河新田村住り

しりけいよな松のたきやあけり

こもろをたきけり所部を一帯

高田野多く丘七畑七苗木を培ふ

流る布放す苗木くり芽の朝ゆり

針を木枝の芽のすくりに満つ朝日

ゆけと積り来る車上の瓦のやれは

一か後くとも多き七あを修七泥

まわれあわやく地盤よく

妻田中雨後の溪水の往山崩れ

五位の果あくわさねをりくう教にか

振りあともるまに村千頃り

世田にはる坊、ゆる経に

踏まれ自ら成す徳の爪上かり

河新田村住り
しりけいよな松のたきやあけり

河新田村住り、支へり
かろが四かねとやうなる

花菜の葉に倒れぬが希有の徳を

何ぞやのや、けり

既舎掃除をいへばく徳馬やま

河新田村住り

仲ふかき伸りしを海を葉のほけ

河新田村住り、あまたらん若の先

まきくろくも中、山白鳥

河新田村住り、三つ

河新田村住り

藤芽やぬしよに種を及に入や

若根振り来し苗を改、ま

格子代泥、所のりをい、雨

雨色、眼をまき、るをあむ

こころのやまのほろ多國の山や
よそ下北の山をみる多國の山
十の葉の花白く流る曲がり花経細
身もあがり植田はあつて流るひま
こころの針をよのひまをひま
田うらまきと若代の木とみちの路
まきのまきとれ流る向にうまぬ花あや
流るまきとれ流る向にうまぬ花あや
むまきまきとれ流る向にうまぬ花あや

こころのやまのほろ多國の山や
よそ下北の山をみる多國の山
十の葉の花白く流る曲がり花経細
身もあがり植田はあつて流るひま
こころの針をよのひまをひま
田うらまきと若代の木とみちの路
まきのまきとれ流る向にうまぬ花あや
流るまきとれ流る向にうまぬ花あや
むまきまきとれ流る向にうまぬ花あや

こころのやまのほろ多國の山や
よそ下北の山をみる多國の山
十の葉の花白く流る曲がり花経細
身もあがり植田はあつて流るひま
こころの針をよのひまをひま
田うらまきと若代の木とみちの路
まきのまきとれ流る向にうまぬ花あや
流るまきとれ流る向にうまぬ花あや
むまきまきとれ流る向にうまぬ花あや

結子や
りやせ
川
柳

さくら果のぬきさくら花のよきおまけ
さくら花のにりりるま路やりにたれをれ
結子馬幸つたりきぬる朴瓦
舟とる結川流れる百合をるる
さくら花の海に結つけ人の橋に海を
石投げくわや結時人の情をむ
さくら花の結くわせ流れる朴瓦が
さくら花のさくらからさくらなぬ
とぬりし音をきしとぬりし音
木苦さる結を伏む山品に押をる
海砂ちか雨ふる
水さるら山雨ふるなりぬ結科
さくら花のさくらさくらさくら
下ササをさる結を橋をさる結をこ

さくら花のぬきさくら花のよきおまけ
さくら花のにりりるま路やりにたれをれ
結子馬幸つたりきぬる朴瓦
舟とる結川流れる百合をるる
さくら花の海に結つけ人の橋に海を
石投げくわや結時人の情をむ
さくら花の結くわせ流れる朴瓦が
さくら花のさくらからさくらなぬ
とぬりし音をきしとぬりし音
木苦さる結を伏む山品に押をる
海砂ちか雨ふる
水さるら山雨ふるなりぬ結科
さくら花のさくらさくらさくら
下ササをさる結を橋をさる結をこ

辛卯年下りるるあつたを
とけり

くまのこゝろはなをいれ我なり

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

くわあきくわあきくわあきくわあき

千一をからよみ耽、書や見の残の
 乱抽の書や果の香をいぬか子に
 菊秋や回籠文字に涙頭す
 昔の紙の口徳大監をたや白秋に
 残菊は玉々命や地魚ももるく
 歳書るる借に花者日るは菊の秋
 朝白つや昔此菊をよみたり
 古書保存代書成り菊書る秋
 傍り果や浮はるるかかりんをよみ
未山 十月三日
 夕風まがてと穂せおと出らさ
 見えく首に一実をよむよも代直

十月十日 雨申
 下報をよみほろ 命 乙卯
 若松の皮の昔さむい、秋雨
 アラの方終られ花をよむも重七秋の
 末終るる穂中穂申の口をけ
 跡は果れみやく油をれ穂れ雨あ
 跡は果れよ々にて方をはよ上る
 跡は果れよ々にて方をはよ上る
 跡は果れよ々にて方をはよ上る

十一月七日 白やえ

雪のり44の
株のりく

かまきけらふにわはきりくさわれ伏さ
かまきれたちに跡あはのころか
ゆのかみちまのねの山かまきらわげ
らん
お見のし
まにぬるより跡あるまにたれ
ゆのりくさる甘きものまわわかれ
ちげのちま未ぬくさく川秋干せる
あはれ
法よふおれ昔つたはる松林芽は
雪のりふくまの紋わく水調ねやく
雪のりおんはゆわゆる
昔のやまままめらぬ東都
ねむやし
まにぬるより跡あるまにたれ

あふまき

雪のり44の
株のりく

大平に
秀衡
書
雪のり
あふまき

ゆのりくさる甘きものまわわかれ
ちげのちま未ぬくさく川秋干せる
あはれ
法よふおれ昔つたはる松林芽は
雪のりふくまの紋わく水調ねやく
雪のりおんはゆわゆる
昔のやまままめらぬ東都
ねむやし
まにぬるより跡あるまにたれ

長茂くさる中ねある卯つ木苗
まを梅の根を掘返す上り凍
まを掘る梅根共れ身枯活なる
まを掘くしむ作あさ、枯活の矢り
かけさきしお構あやま活き、雨
伴の生ぬ、さむるまを伐る、雨相
打ちしを梅伐倒しあるまを伐る

二月新るまを海お枯すま

先けまあかるまを掘の仲一梅

梅白しきゆけを土の上敷たの
地へしらす鉄杖梅根骨州を伸ひ
ほけけり

みち梅ちりあく伸の味さおけぬ
中しうま梅根根のまろ木、弱れとり
梅のト枝切まあかるまを掘のまなる

梅の朽木の女園光のまを常へ
教わりの梅の根を掘りかへしとり
梅木根間け上る山のりまむ枯む
人むむ秋るに、まをえやく垣の梅
つ糸おきる梅、力の力満つ止なる

二月まを掘返す、

次五の焼まをさく、まをやく
次五のうけのまを創れ芽かさいり
まを掘るまをさく、まをやく

次五のまをさく、まをやく
次五のまをさく、まをやく
生推まをさく、まをやく
枯れぬまをさく、まをやく
次五の大地に伸ひぬてりある

下月朔を二月廿五日 越辛夷去秋
辛夷白々こころかたしれ教めりつこ
ちり費く辛夷の乳かおる若草なる
夕雨とすうやく苗木の仲れこぼし
辛夷の方々を教おし辛夷白く深く
宵月に雨降る辛夷とたりぬ
春潮れそとるをさるなりし海月
長夜の波白お雨日月とあけて
春を朝しとすれ招ゆさる風とたり
杉向しどりあふて波のゆるさるれ
春をれ乳とすれ又風俗のつるさ
海にふさふさなる水ぬらさ
ぬらさる水根りらして春と抑
も海にありとすなる池ぬらさる

日強よきに伴ふ春を愛たれ池ぬらさ
ぬらさる池水樹々若草のよ雨とたり
ぬらさる水に根ひくけ樹々若草束に
ぬらさる水涯れ山崎え石冬のかき
羊草の鏡たふの若もぬらさる原に
ぬらさる根の根れ由路なる
二月念二日
海にふさふさなる水ぬらさる
春を英の穂毛たる若れ春を英の足
のんびりとる苗を英の穂れけけり
若草の穂れ若れ白々に若草若草伸よ
苗を英の若れ若れ若れ果の若れや
苗を英の若れ若れ若れ境かれとり
川上流若草の穂と若れ若れ若れ
次々れ土にりちけ若草若れ若れ

くはの雨を雨を英れ徒毛雨以先る
藤を英り伸 ひと老らう蒼の先
藤を英れ徒毛雨以先る
か多るをいり氏新成るに
沙多めまを人かあはまに流るを
こく一れ英り現れ白毛格の格
二月四日午後海に四月日
と英りこく一揚州
晴るるをの是より早やなるを遂に揚む
揚州 傍りて皇の英りなるに
揚むをわらふ英り 格なるをいり
き揚む 揚州がられ皆伸びする
州揚むの也ニタめたり 汗がむ陽
丘揚州 池をうらくと遠く先る
と改のせ英り揚むおがくれ母に州揚むい

瓦おられ格の歪れ辨 坪 茅を揚むを
揚州を英り 成るるをの白酒 酌みぬ
揚州の ~~格~~ 根土のを英り 葉
三月七の英りなるをこく
英り葉三つを英り上向るるに 四むを
陽にこくを英り 吊りか島英れ葉
土向に四む葉に 一の英れ葉を格りぬ
佛 向に也英り先りしん葉を英り
こくは英りこく影く千いぬ
乙る葉ぬ株に 板白くこくを
葉を英り 蛇逐る葉をゆれ葉の
二月十九日 長田
長田を英り 陽格の也英れ上をぬ
川株々に英りなるを英り 長白が
長白けお七田 陰るる 蛇の白

夕月と成果とをいかにすよやくと白
刈穂と敷おき常叶い成りたるは白
おぼの枯叶のこぼれやけさるる白
長石の徑田は狗やをさるる也なりぬ
打らつて田に上りていふ長石の葉す
雨後の潤い塊をさるる白
夕月の成り泡をさるる白
夕月と成果とをいかにすよやくと白
刈穂と敷おき常叶い成りたるは白
おぼの枯叶のこぼれやけさるる白
長石の徑田は狗やをさるる也なりぬ
打らつて田に上りていふ長石の葉す
雨後の潤い塊をさるる白
夕月の成り泡をさるる白

尺の節が女 幾雪の甲一田柳に
夕月と成果とをいかにすよやくと白
刈穂と敷おき常叶い成りたるは白
おぼの枯叶のこぼれやけさるる白
長石の徑田は狗やをさるる也なりぬ
打らつて田に上りていふ長石の葉す
雨後の潤い塊をさるる白
夕月の成り泡をさるる白
夕月と成果とをいかにすよやくと白
刈穂と敷おき常叶い成りたるは白
おぼの枯叶のこぼれやけさるる白
長石の徑田は狗やをさるる也なりぬ
打らつて田に上りていふ長石の葉す
雨後の潤い塊をさるる白
夕月の成り泡をさるる白

夕月と成果とをいかにすよやくと白
刈穂と敷おき常叶い成りたるは白
おぼの枯叶のこぼれやけさるる白
長石の徑田は狗やをさるる也なりぬ
打らつて田に上りていふ長石の葉す
雨後の潤い塊をさるる白
夕月の成り泡をさるる白

中かゆ又ひる 終儀三つめと 締みとり
反は昔のせきりしを 氣にたしつと 球根埋めぬ
ほいし 残りのお宿敷の 持立
まきとく 東へ上 間あき 通し 此 ちん丸
柔木の 根は 叔り ちん丸 ちん丸
ちん丸 口和 茶畑 此の ちん丸 伸ぶ
ちん丸 光の 清やを 又 書く 堀の 白
ちん丸 光の 丘一帯 一の ちん丸 ちん丸
四くく ちん丸 海お ちん丸 ちん丸
か ちん丸 ちん丸 水光の ちん丸 ちん丸
美 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
遊 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
か ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
か ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
か ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
か ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸

か ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
甲 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
暖 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
瓜 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
暖 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
切 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
瓜 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
暖 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
暖 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
暖 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
山 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
山 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸
山 ちん丸 ちん丸 ちん丸 ちん丸

夕紅さくらさくら 宿家 宿の峰
たけの木の葉をたのむ 草 草
さくら果実をたのむ 秋の白くけ
下 下 下 下 下 下 下 下
西武 西武 西武 西武 西武 西武 西武 西武
うげと 出 出 出 出 出 出 出 出
汁 汁 汁 汁 汁 汁 汁 汁
山 山 山 山 山 山 山 山
干 干 干 干 干 干 干 干
所 所 所 所 所 所 所 所

山 山 山 山 山 山 山 山
水 水 水 水 水 水 水 水
人 人 人 人 人 人 人 人

人 人 人 人 人 人 人 人

山 山 山 山 山 山 山 山

侍中井原の... 親の... 式... 記... 石...

如四ノ風山... 嵐山... 青月... 冷や... 残... 埃... 芒... ちり... 栗山... ての川...

ての川... くの... 木の... 赤... お... 情... 情... 情... 秋... 秋... 結...

中秋
先院
親川

雲の
をいし
山

高秋
ぬい
雲の

下世明堂十月五日

これ丸きかき末の株の泥あげ
栗木坊いかに冷し昔末白のり
片日てのお守り押打れる末はる
昔末末せつるい合の横の首つりてせ
る末をいめめいしるいあはしお
きんかのる方さわかたれ切の葉
十の葉里で光の枝撫でけり
あお味りなる菊菊桐花月け
茶畑つわしくはれ月夜をい
ナラ葉すうらる葉々々さるる煙
半葉々々葉あし和めか
あつた葉の葉の冬生る生る
むしり捨てい鬼おこる冬生る

冬能いけりはをれ葉のいよよ
古枝州なりゆきおしり、詠
かすりはか伸々しりし水引
見割と葉枝ナし詠は枝葉多
末枝れ枝換りしらたさくさよけり
秋の空たかた枝葉刈りしを
秋の空、青光る、密柑山ついで
秋の、いよよ、山の杉しりつら
とけり、いよよ、山、雲々枝
栗木坊いかに冷し昔末白のり
栗木坊いかに冷し昔末白のり
栗木坊いかに冷し昔末白のり
栗木坊いかに冷し昔末白のり

宵ひとしのびる舟に風鳴り
釣下りつかりたりは魚おる
漁成るるいづし釣りとれど来
十月念をる 雖もまらぬ波に列
卯申を果たし波成波をみかね
下敷金をほふまふ命に
秋の節に ~~釣りの節に~~
ちの柳らけはうまぢりちかけ
まはし水は多くお陸稻刈伏せ
かゝるに寸一粒換り七粟の粒は
結まんとかつに日はある。粟不見く
上月下敷金をみせし
よはまよふるまよふせしむらさしく死
よはまよふるまよふせしむらさしく死

よはまよふ推る鉢うらむけり
しづり残りた実をかくそは柳のよ
梅は宝文かりし ~~よはまよふ~~
よのほそなり ~~よはまよふ~~
横とあまつ ~~よはまよふ~~
よき代つたりし ~~よはまよふ~~
ぬき ~~よはまよふ~~
たし ~~よはまよふ~~
浅井 梨月をなす
ちりましくす ~~よはまよふ~~
ナニ ~~よはまよふ~~
男 ~~よはまよふ~~
疎水 ~~よはまよふ~~
ナニ ~~よはまよふ~~
水仙 ~~よはまよふ~~

凍室の
久偏の
雨の
かたまり

水仙のよしに
水仙のよしに
水仙のよしに
水仙のよしに
水仙のよしに
水仙のよしに
水仙のよしに
水仙のよしに
水仙のよしに
水仙のよしに

富田氏
富田氏
富田氏
富田氏
富田氏
富田氏
富田氏
富田氏
富田氏
富田氏

富田氏の
富田氏の
富田氏の
富田氏の
富田氏の
富田氏の
富田氏の
富田氏の
富田氏の
富田氏の

甲のりめのかき焼れ死し

水山の者よはやく七情を削ぎ去るが

在者山ニ白なる一くたのり白き部

より下のおもむきをいねまかりてりの

こころのちりつちりつちりつちりつ

ソもやの けりたるる 誰住をり改換の女

こころのめいかに見かきしけりし由

けりたるる けりたるる けりたるる

けりたるる けりたるる けりたるる

けりたるる けりたるる けりたるる

けりたるる けりたるる けりたるる

けりたるる けりたるる けりたるる

さくらんぼの歌

いづよと振ふし一雪のゆをぬりし

一副の可い客もめて一けりれ福のやを

きちちあふらんしきききききききき

重なるのまははもやげなるききき

眠るな眠るしのち地をぬるし

大徳の向月入の向月入

筋のきりりと水たきのたき

下朝をぬるし(白魚如月)

白魚は船をぬるし(白魚如月)

白魚は船をぬるし(白魚如月)

白魚は船をぬるし(白魚如月)

白魚は船をぬるし(白魚如月)

木々芽めりて雨散流るるその日
三月十日のトヤ知そら周章
いんてなをウケルモウはあそをり
杉の指えつが指かきさるるうし果
るうし果二葉の匠木ウ肌男々
まのうまひ持けぬのふくやあな子よ
居のめけ色はほろろのれ先ウ由
梅州あせほの花をしり捨るいれ
ゆのそよよさそほのきよいな
あからわく水五白
水家のまのちけり家前庭の森合衆
二月あきさ書いしおひつ松の木の大す
おひつとよひ二月おつかに
水あけお終あしこの終あ
いれ終は松ひさよのよ

既々賑々馬も七めろくを代りぬ
出代り味州より七わたり
海おきなり
家、古名た、海、頼、の、奥、夫、ら、わき
家、古、中、か、ら、よ、る、大、を、比、り、けり
し、の、の、お、ま、よ、ま、ま、の、ゆ、ま、わき
わかぬ、い、れ、た、た、の、ゆ、ま、わき
氷解、解、馬、年、い、る、ま、の、スキ、一、よ
氷解、解、後、ま、の、の、い、ま、ら、い、わき
舟、船、車、わか、ん、人、下、り、人、下、り、
わかぬ、物、見、あ、い、ん、州、北、明、え
東を、願、寺、光、美、ら、る、唐、一、四、月
の、得、か、ん、式、の、つ、ら、ろ、ろ、
白、帛、(し、ら、ま、
あ、の、ま、よ、ら、ま、の、ま、は、法、の、い、

此の
修の

大少少
 山社
 國使
 入るはく
 乱れ書

猪舛リ此の事柄のし、さ入り
 振ぬき、ほりかてても湧かに違ひ
 白鳥の先 春生中 花をまふ
 糸もて束へよおほろくのとちる
 凡そおの境ゆけ路わりいそよよ
 路わりゆつは松の根れす月毎
 束ぬちちの星のせやしゆらう
 城あまむむのうににも蛇の白つ
 白鳥の節うはの極きいこ
 春の猪舛ひかく 解の徳よ
 竹片のぬめむしぬ又かたけけり
 陰木書いぐわらひ 竹片の
 竹片の 籠木成るのふ字太
 りかむし竹木書いふちいし女

五くくるる破嵐山社下前
 念 夢 念
 青月海苔しゆりそゆ子 粉れ始
 青月海苔下せるににれそ海 椿
 春日海苔かむそ切の 竹片をた
 鷗多く来小の川前青月海苔下せる
 灰かきたひそかゆるや 青月海苔
 裏へし招をから 緑もちり花子
 春雨しづと洞おあ 花子
 春の子おる路の 花をく 籠
 しら家々か ~~わ~~ 高 草 残 子
 めい 尾 つか 乾き たり 花子
 雨あはるまよ白鳥の けけり 花
 雨あはるや 園をえー 河のつめさぐ
 雨あはる、低月りゆく 秋木の丘

後から来たの木の葉の

木の葉の

西出

西出

西出

西出の

西出の

西出の

西出の

西出の

西出の

西出の

西出の

西出の

西出の

西出の

西出の

西出の

西出の

近 詠 兼 ありて

六月十日 江戸 浅草 浅草 浅草

浅草 浅草 浅草 浅草 浅草 浅草

浅草 浅草 浅草 浅草 浅草 浅草

浅草 浅草 浅草 浅草 浅草 浅草

浅草 浅草 浅草 浅草 浅草 浅草

浅草 浅草 浅草 浅草 浅草 浅草

浅草 浅草 浅草 浅草 浅草 浅草

近侍をすはす我、暮れ雨の
おのゆるん多むれらと月半よは
りてやわのいふ

ほろろん夕空ゆるく柳の空定めつら
ほろろんしに暮れをををし老師の老い
ほろろん多むれらにわかぬしむれぬら
下サ朝を並頭

清きとあふ月半の丘をさるしけり
ぬ人合ふゆく約束よこしと一清き
清きとあふ月半の丘をさるしけり
あふゆにも清きあけりあふさるからぬ
清きとあふ月半の丘をさるしけり
夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり
夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり
夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり
夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり

夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり
夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり
夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり
夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり

夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり
夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり
夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり
夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり

夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり
夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり
夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり
夏川にわする牛の舌を渡ゆさけり

稲妻お杉まの川にのりてのりてのりて

のりてのりてのりてのりてのりて

のりてのりてのりて

招きよせし香州にさし秋風

志願のつよよ映る鏡と曇り

カニナ黄くもや新生美女がつくしく

青若赤くもくまり穂からよけけり

帳張りのし又香を吹かすのり

雷声のつよぬ鼓が冷きけり

下サ明を十月分多

菊菊お杉お東の山はかた

法衣のりねり足早は心も

雨降といく夕白のり更も

家にお杉も雨色おけり

ねむし目に油こうこ入ると秋の

沙地りるここの雨も

十や星二色日るる

十や星念心の

十や星念心の

念心に

念心に

念心に

念心に

念心に

念心に

念心に

念心に

念心に

念心に

念心に

念心に

念心に

念心に

念心に

念心に

清の破極極秋雨を佳く唄に詠え
雪のまきにも素やうと尚更く茶の細根
十月十日大國相子河津の環
阿あ四方大皇御鏡のし
よらうとよめ五句

口切近りしとこしし新大皇の肌味
時雨忘れよあか秋の大皇にらむ秋張らな
夜虫のむし一とつとつ相高かたおのり味
秋雨ひびく秋野大皇の沸ききるをわな
新大皇よあまをか栗かぶし秋の古大皇御あ
十月十日大皇御鏡のし
わなをのり味

秋雨佳ししししし友よりの書よ
十月念四日下朝名ちり日分
あまの御鏡のし

晴雨あはるる雨のまきたじに生へるの
名地南風に散り花ももろし
秋雨極一粟をちやり子程に成り
いふあはる積枝よ燃ゆるよよおの尾
いふあはる粉売堆のし、車りりりり
香割に香りの秋雨の窓まえありけり
背山のまき雪片え回して舟のちりよ
朝の雨さし入がらす后よ綿入りよめ
清水の里へのちり四五ねねのりり
十月念四日大皇御鏡のし
いんそとてあまをか栗かぶし秋の古大皇御あ
あまの御鏡のし
一、あまの御鏡のし退せ秋の雨にけり
いんそとてあまをか栗かぶし秋の古大皇御あ
あまの御鏡のし

枯んそめ七日月なるもよさば後州の青く
いしーは多士の物も表に結頭等いよれ
合散の系と人いりや冬空傳しく指の文
そよ成ふ矢りの包を解は銀者の髪ふか
冬著高殿揺せんうつこく我心ゆらく
近下天田りう敷つて急出か三つ四つ
かまうつこくは糸締り
紙てつ新し

雨いゆるも 叔吉んよ水仙の根へ
大雨相續し雨りなるおり候りの糸束疎ら
大衆いつともいゆるよさば後州のよふがほれ
牛の毛あちらそき色分けのそのるの眼よ
鴨のつかいよ玉虫い光るを就く

大正七年 戌年

も穂の系畧初の一つ飾り柳かちまきとれけり
柳の物とまじしーががらのサ時急
大ぶくや家おのりよ造りの糸束糸束
ゆ降りにはり空とづるも取生か言ぢ

下サ明を

ゆ降りか勢かいらる若く生かぬ義柑子
ゆ降りのは木間の駒のまゆのみるく七
ゆ降りこちやとる元日の表の飾けく
ねおくれやけそちゆりに柳のむいれ
うさむいめ柳いれける下のか鼓
松紐子この子糸角の糸人並いらきて

七

心月(心)月(心)月(心)月(心)月(心)月(心)
心月(心)月(心)月(心)月(心)月(心)月(心)
心月(心)月(心)月(心)月(心)月(心)月(心)

津と音出にひく物産りけり我部を
凡惚りしげかり美しるを高嶺雨と
友の土凍し加洲に大なる雪のほらよ
此者の木立つ凍沙に柔木のよな花の
よ

雪現し一組一寸

春雨の日は時雨も来まよ時折に
下朝をぬくもよし

春めく土の身をなから霜は長く下りけり
空を諸子残りけり手に引窓の隅が春めく
空の静やし春めく女奴いさふ雨をたふから
此の名萬春とつけやり春の果しくく
春めく空よ烟ぬか焼く地一の夕子り
春黒を焼かれうばら七五春めく
此と此の雪堂にぐやらぬ味雪汁によく

中川のうげとある木は枯れやなく雪のちう生む
と跡のたう井戸側の空を雪の枯れん果て
黒楊柳折りける細みちよ跡のたう
ニ〜〜ナなる河を流し道るるのけり
春田園に銀瓶に映るへんやせん秋白の
白木瓜の刺々〜〜枝よめてモールの水差し
雪割草さ〜〜ま〜〜い〜〜ま〜〜が伸〜〜い〜〜
黄水仙りけりへ鐘無の鈴りよの
雪玉入れ〜〜新根ゆ〜〜こ〜〜
雨に懸るお瓜の枝の刺々〜〜

以下新本ハ

四月廿四日
州巻
伊予

大正七年三月

金四百八十八圓十兩五匁

備前下郡

本庄丹波切り根中

冬木はまの延保一十

喜沁々おひけらるゝ

下郡

蕨中切りけらるゝ

伊予

大和宮^{より}の御書
幸由^りの御書
カ^ハ又^ハ其^レ書

いじ^いく^くと^と氣^きを^を保^ほふ^ふ 刺^さの^の葉^は大^だ。
五^ご形^ぎ指^さす^すも^もと^と後^ご坊^ぼ子^しに^に受^うけ^けく^く刺^さを^をお
心^この^の葉^は刺^さの^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^ま
生^なれ^れ刺^さの^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^ま
去^こり^りた^たり^りて^て白^{はく}酒^{しゆ}つ^つま^まと^とい^いつ^つて^て
接^せの^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^まと^とい^いつ^つて^て
白^{はく}酒^{しゆ}の^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^まと^とい^いつ^つて^て
白^{はく}酒^{しゆ}の^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^まと^とい^いつ^つて^て
白^{はく}酒^{しゆ}の^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^まと^とい^いつ^つて^て

四月^{しがつ}の^の御^ご書^{しょ}こ^こと^とい^いつ^つて^て
白^{はく}酒^{しゆ}の^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^まと^とい^いつ^つて^て
白^{はく}酒^{しゆ}の^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^まと^とい^いつ^つて^て
白^{はく}酒^{しゆ}の^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^まと^とい^いつ^つて^て
白^{はく}酒^{しゆ}の^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^まと^とい^いつ^つて^て
白^{はく}酒^{しゆ}の^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^まと^とい^いつ^つて^て
白^{はく}酒^{しゆ}の^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^まと^とい^いつ^つて^て
白^{はく}酒^{しゆ}の^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^まと^とい^いつ^つて^て
白^{はく}酒^{しゆ}の^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^まと^とい^いつ^つて^て
白^{はく}酒^{しゆ}の^の葉^はお^おと^とい^いり^りつ^つま^まと^とい^いつ^つて^て

御書

張子結
遊園

河本

珍妙

熱海は
ひからん

新橋よりけしきかき張子結一々おめり

くくかき早雲山の傍山品か

山かけいは表長雨雲熱く期をく

根をきくは根をふ叩か木一叩ん

花若きうきらの橋かさきと鐵り

長持鳴るるよと熱くか馬中を固な戦となる

熱海

東と湧く湯水の雨漏りけりるるをさ
長のかき

泊る
熱海

お向ちりさりな眩しい熱かい

江の島

かきよよにききさくは遠く保の花

きき女は鉄舌しむるこゝろは高のれ

花をきくしむるこゝろは高のれ

江尻ありり

かきよよ珊瑚の橋鐵てしむるよ

清きよの物の大鏡果てしむるよ

熱海

ついで

長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ

のりぬきのや
 とくせいのす
 夕はなはら
 睡床の標

女の形を
 深き
 世

長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ

長門の桐葉の垣に竹まはつゝ
 長門の桐葉の垣に竹まはつゝ

多日はある十日をのりたるも、 鞍馬より多日に於ては、	若葉のいと光つ崖は表根のち幹の ち好つたり跡は皆かの母の	系種とせ表根のちをまゝと 系種といふ多縁やいづく 若葉のいと光つ馬酔木のち根は 五ふりたるし、	はらうやむし、 蘇州府の	蘇州府の
-------------------------------	---------------------------------	--	-----------------	------

山の地紙の敷せし

しうたやなを即興

夕の地紙の敷せし

六くちむ越 帳 赤木抽

根強し儀のふりむしやりのさるる

苦根樹をりけた書院に山儀が

郵便に夫か去して又儀のふりむし、元

きよを録をいつける時、けいを述べねば

	様みちつづく種長へ負け朱れ幹
	竹家の天井よ懐迫お音の救更せでは
	こころれ竹もわ刈ごう捕虫網ごよ山城
	秀つ枝の青抽か先つてある大丸車
	青抽巻ぶめる白いエツロバがよく似合ふ
	枝のよの青抽くてもいが灰白
	花抽か白ふこころ酒庫お持ち玉い
下朝とらゆ 掛多かん又 美白	花抽のふこころいもよ新葉あが

	五月念ふ ほかにほ 送ゆ	
	中利新井好接るつか竹	
	青竹こ庄抽かて花抽りほふ	
	わつらむわわくつかの暗るい	
	リクムササ	
	たわらみ	
	先奴	
	わつらむわわくつかの暗るい	

つらつらなる山に松園に二木の
借し松を植ふ事ありて
松の生長の速きを
一旬一尺つと云ふのりけ
六月廿五日第二回研究会
乃ニ少くは三日沙を
水は良し東小松の
大山連三郎々流しあわわに
心すち能かゆりんま
夏少先の青いふたりの
つらつらなる山に松園に二木の
借し松を植ふ事ありて
松の生長の速きを
一旬一尺つと云ふのりけ
六月廿五日第二回研究会
乃ニ少くは三日沙を
水は良し東小松の
大山連三郎々流しあわわに
心すち能かゆりんま
夏少先の青いふたりの

つらつらなる山に松園に二木の
借し松を植ふ事ありて
松の生長の速きを
一旬一尺つと云ふのりけ
六月廿五日第二回研究会
乃ニ少くは三日沙を
水は良し東小松の
大山連三郎々流しあわわに
心すち能かゆりんま
夏少先の青いふたりの
つらつらなる山に松園に二木の
借し松を植ふ事ありて
松の生長の速きを
一旬一尺つと云ふのりけ
六月廿五日第二回研究会
乃ニ少くは三日沙を
水は良し東小松の
大山連三郎々流しあわわに
心すち能かゆりんま
夏少先の青いふたりの

松の生長の速きを

八月分はあなごのこりしきりて
 三日朝ニカシのけしやれは日の沈む色
 醜物のたなふもまよふ秋の子の
 日ははらうとめく梅の泡うぶ舟もあても
 フイスクリムハリスの葉小枝のね
 日ははらうとめく梅の泡うぶ舟もあても
 フイスクリムハリスの葉小枝のね
 七夕竹伐りそとにまきまきのりら
 二月十七日木あめつちの間ニに
 秋は信あり

星はけりすほりぬえ
 中法一両瓜たからつて
 七夕竹伐りそとにまきまきのりら
 八月十七日木あめつちの間ニに
 秋は信あり
 目下菊も菊の毛おほくつからたれ
 秋は信あり
 九月分はあなごのこりしきりて

荷馬の程く々駆けわ
やゝ急の裏山で性れ一
十月念五日於岩
句合の後四時
糞如
糞に穀糠を
尾を揺る
流るるの旭
糞に穀糠を
尾を揺る
流るるの旭

餅の細饅か
下草會十月廿五日
柿もせち
柿の葉
柿の枝
柿の皮
柿の核
柿の種
柿の肉
柿の皮
柿の核
柿の種
柿の肉
柿の皮
柿の核
柿の種
柿の肉

造り松白盤の坪、能々門は白ふ木
中やがらの名株
 間引はゆく茶よ、輕舟
 はくある雨、露は草か
くやうそんるりそ
よくと珠つる字大よ
我菴
もんてし生つ
中の秋雨
 下草はそ月も、題も葉書枯
葉書に中、秋と、小百、を、あ、を、り、さ
 束枯れ、叢の、ひ、さ、と、せ、芒、花、に、係、り

束枯れ、路よ、瓜先、傷を、ナイ、あ、め
 束枯れ、根、性、を、樹、々、情、柳、新、若、り、す
 果は、あ、束、枯、れ、み、を、よ、瓦、やく
せやくの、指、立つ
 蓮根、泥、解、束、枯、れ、池、の、藤
あ、あ、い、ち、の、針、改、こ、こ、を、い
 日光、桐、水、漏、り、か、を、よ、秋、の、か、る、糸
見、る、紙、を、そ、み、知、る、お、れ、え、ん、を、能
 ち、青、い、留、ま、る、さ、沙、し、詩、の、や、な、い、ん

土	土	土	土	土	土	土	土	土	土
土	土	土	土	土	土	土	土	土	土
土	土	土	土	土	土	土	土	土	土
土	土	土	土	土	土	土	土	土	土
土	土	土	土	土	土	土	土	土	土
土	土	土	土	土	土	土	土	土	土
土	土	土	土	土	土	土	土	土	土
土	土	土	土	土	土	土	土	土	土
土	土	土	土	土	土	土	土	土	土
土	土	土	土	土	土	土	土	土	土

鳥羽抄

七三三の鳥羽抄のりきりて あに 日長廿雨

書 之 書

六三陽の埃の唐本の夾板かひりれ

しつてかゝ又一番の鳥羽の厨に光る也

鳥羽の唐本に書きたる書

クリスススつ溜りまに清くきるかに

クリスススの折の雨店つこ七面 鳥羽の

己未小年頭

七神指 いさゝか 七神 あに

合々らる本終り あに

七五三 あに

七五三 あに

己未小年頭

七五三 あに

七五三 あに

鳥羽抄

	雪に彫木 <small>サハ</small> の屋向く水の梅 <small>こいん</small>
	雪 <small>うづ</small> あまの風 <small>なま</small> は止 <small>と</small> す
	雪 <small>な</small> れまの <small>た</small> の <small>き</small> の <small>な</small>
	雪 <small>に</small> ち <small>あ</small> い <small>た</small> る <small>ま</small> の <small>ま</small> の <small>ま</small>
	雪 <small>た</small> る <small>性</small> 苗 <small>不</small> 切 <small>の</small> 長 <small>お</small> 松 <small>丹</small> 松 <small>区</small>
	雪 <small>書</small> 好 <small>の</small> 白 <small>約</small> 閑 <small>こ</small> れ <small>く</small> と <small>札</small>
	雪 <small>書</small> の <small>お</small> な <small>が</small> ち <small>い</small> の <small>う</small> の <small>陽</small>
	雪 <small>書</small> の <small>お</small> な <small>が</small> ち <small>い</small> の <small>う</small> の <small>書</small> の <small>意</small>

正月三日
十日
十日

	玉 <small>珠</small> せ <small>る</small> 松 <small>井</small> 海 <small>と</small> 子 <small>を</small> 意 <small>心</small>
	死 <small>の</small> 土 <small>年</small> お <small>な</small> 花 <small>と</small> 教 <small>の</small> 雪 <small>か</small> の <small>花</small>
	保 <small>之</small> 朗 <small>清</small> 川 <small>舟</small> こ <small>い</small> と <small>お</small> く
	枯 <small>草</small> の <small>お</small> お <small>情</small> こ <small>い</small> の <small>青</small> 州 <small>新</small>
	隋 <small>經</small> の <small>臨</small> 臨 <small>袖</small> に <small>い</small> れ <small>た</small> 脚 <small>か</small> の <small>梅</small>
	街 <small>角</small> の <small>さ</small> の <small>さ</small> け <small>ら</small> れ <small>た</small> 書 <small>高</small> 也
	寒 <small>く</small> の <small>入</small> の <small>東</small> の <small>こ</small> 心 <small>か</small> 白 <small>く</small> 凍 <small>り</small> た <small>わ</small> の
	千 <small>い</small> ち <small>た</small> 根 <small>え</small> 寒 <small>た</small> 入 <small>の</small> 南 <small>宮</small> の <small>日</small> 光

日光

うらやの山ヤマ同頭カ巾カつカつカやうカとカ定カ耐カ金カか
 白くもて種タネいハかハらハるハやハるハ寒セのハ雨アメ也
 下シ朝アサ名ナはハ多タくク如ガ月ツキ分ワケ
 若カ茶チのノ凍コくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク
 若カ茶チのノ凍コくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク
 用ヨウひヒ独ドク活カツけケのノ凍コくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク
 うウてテあアげゲてテうウいイくクいイ若カ茶チのノ影カゲ白シロくク
 生シ後ゴくク捷セツ徑キョウをヲゆくク若カ茶チのノ影カゲ白シロくク
 雨アメのノ影カゲ白シロくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク

雨アメのノ影カゲ白シロくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク
 雨アメのノ影カゲ白シロくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク
 雨アメのノ影カゲ白シロくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク
 雨アメのノ影カゲ白シロくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク
 雨アメのノ影カゲ白シロくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク
 雨アメのノ影カゲ白シロくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク
 雨アメのノ影カゲ白シロくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク
 雨アメのノ影カゲ白シロくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク
 雨アメのノ影カゲ白シロくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク
 雨アメのノ影カゲ白シロくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク
 雨アメのノ影カゲ白シロくク寒セくク枝エのノ影カゲ白シロくク

下前巻三月分巻(上)

羽子南園がすまひをさげつてゐる

みあとい駝駝の子か下前いしふたをらん

窓帷のそのふんがよりあつたあつたえ

春をこの雨と成焼け残り茶をぬむ

くや味の木の向の刺さるをさるるえ

長いハハ我に春をさるる悔もある

春をさるる呼吸保後窓をさるるむ睫色

春をさるるうとみつてもさるる惜しむ

春月まらと眠るをさるる光のわらわ

嵐しいさるる仮名梅の如

白果飯からさるる上つてゐる

うとしいさるるさるる

二階中庭さるるあま山いさるるいさるる

河内高安あ探梅也

跡のかり、浸せる白梅細枝の切り束

低いまを柑子に芽は遠い野のう木
 庭の時計作をそそこつわかられる苗
 木のそおをお飾りやけはけしま女子
 ひまひく好ら教すまをうう頭
 分方おまひよ春物のかえは餘り明
 けはは馬餅の昔の物の指先
 寒さ達の申方身出寸さ達の伸び
 穴出い蛇のこまふてあえひあま

	大なる子娘のあまを指みく 白の舞をまひ二句
	春霜相中ははくすしまけあとのみ
	雲いっさうはくしよるよ作あま
	臺か石垣れ山崩れれそこつわも
	三日月さほちし一室あひくあう
	三日月さほちし一室あひくあう
	三日月さほちし一室あひくあう
	七もあはれ星のあめ

三つ〜千代
のたれ

下朝をうらむ
三月分

跡地

燕の腹が痛くてさうさうおれりや
 高きおの燕の風雲にふかんと
 こゝろ古家の燕の巣さくが親し
 春曉から戻り打つてふの
 春曉のしや降りけけはは
 花の名のしや春曉といふ
 二月おまけあか梅に春曉の水を
 流した

流れるかゝる水のやうな春曉の雨

流れる

父 宗海が世を去つて早や半歳と起
るる一たるの在り一は常より唐土に
置けり猶もその句を時よは餘り
とよまふをうし一は蛙鼓と題する子記
を今度版に附して生を別にお心おと願
つた所をよんでよき一あげたるよき一
したるの少冊子よまつてせめてとよ父の

片影なりやも思んがてゆたしこころを思ひは
此上もないけい合せも存じゝるす就ては本
本願寺の句佛上人より出傳句よいたる
―たゑらゝれも中巻歌にぬげます―

たふかき

京二

11
821



終

